

滑精系石人

編

下

13
3128
15





音毛(音)

音曲(音)

柳亭

左樂

二二二二二二二二

乘

善馬

談志

柳枝

柳枝

心之

春連

原原

滑稽和合人四編卷之下

原おれ

江戸

為永春水作



怨くちうゝ和合人四編卷之下
 思ひつれり種りあゝお袋様借引強り
 いら茶を忘るるふを採せしを人伎術
 頼白も打忘れ能子の勢り奴出せぬあゝ
 ら〜押問答を〜
 一ととろ小僧が返す小僧も

古今入下

小僧を若くも同じく立降るは路の池の酒肴
 をいづくおつけられ此もどらに降る取らぬ場合と
 ありは人の顔ばかり白眼合へてあつたけかへるる居
 るところへ。張る茶え糸の二人妻々の肉を配る
 此も葉え「ヤアは知れど」心どくおひさすおひさす
 此も「アレいんあがぬり」とはさくけつららと
 妙ぎにぬりぬり 此も「オヤ何だうおのぬり顔色を
 探測へ顔を辨る 此も「オヤ何だうおのぬり顔色を
 辨るのさ癖 大をさ」此れをさ出さすさささささ

ても法うぬ指子ごが是れおア何を決の何うさ
 葉え「遠へぬけ」さあ連中がさうく「取あさ
 寄れも法けぬで〜見〜居る答へぬが待たよ
 何そ顔向のさ〜あるまうも知れぬや」ある程
 酒や者の中へおがし〜も切はん〜ある何れ
 しろ由那ハされぬ〜ウ和次さん道中へ出ち申
 此も「ハ〜」と葉え「ホニサ様へ出〜るる女遠より
 弁ふた〜ぬへのぬ実ふ〜酒肴〜二個入

此も「ハ〜」と

〇三

一番小銃道をたつて思ひ抜き矢次郎
ハ右指の切名を思ひ抜き矢次郎
と矢次郎を引。瞬目をあめ
あがら舞うに幾度かあはるのうさ七場
と七場「舞うサおまがらまをうさうと思ひ
取りあせへ者ヨあんあももどあも者中あは
ア何あうう大のどあうくはあひとあ
うらう矢場公 矢場「まこと顔ッぞとさう鼻も眼も
やバ（う） 矢場「まこと顔ッぞとさう鼻も眼も

はも藤とらう程幸くあううのうさう
指さふけう何うしあうり振りあへんのうさう
人ふ知れずあう何れねのうさういひあうさう
葉足「サイ場うああはあはあの場二「ナニおれが
さあやあうねうとあうさううううんサ 何れが
うんあう白服あううあうさうさうくとのんぞう
舞う「ハハハ日ハ短け「せはあ「あんどほ怪一あまがけ
ど指を舞えをあううううけ改園ハ葉知さう
ぬく場二「ハハハう疑うううあうまうと毎和次郎



お敵むく春く茶見さや沸きの心むくを
 まれびりお敵むく 春のこころをわら ちあはらし
 今やぐくお敵むくの心むくを 春のこころをわら
 か ころら 春のこころをわら ちあはらし
 七場公一お敵むく 春のこころをわら ちあはらし
 け 身ア春のこころをわら ちあはらし
 か ころら 春のこころをわら ちあはらし
 揚ニ ころら 春のこころをわら ちあはらし

一お敵むく 春のこころをわら ちあはらし
 春のこころをわら ちあはらし
 イヤ 春のこころをわら ちあはらし
 ヤ 春のこころをわら ちあはらし
 春のこころをわら ちあはらし
 春のこころをわら ちあはらし
 春のこころをわら ちあはらし

お敵むくの心むくを

お敵むくの心むくを

権柄の...
...

能く人ふくぬくやふトヤつて城梅まぶくども
怪しつとト揚ニイヤモウ解ら
ぬも程がゆら何松しと彼んぶからと
香むゆふおんあ、更ぶアまも那ぐまご糖ふ
あつたあつた一まの彼んがアセヤ
御を御くのみアレ又気陸お支をあせ葉又何
でも酒ふいさつたあ遠くねト言ひつて揚ニ
公兵がいらざやうかつたあ彼んがアセヤあうら。ア

西側を今ぬい葉縁ぐやのまへト言ひつて葉縁
葉縁ふあもとのめつたあうらとあまはるぬ音
ねむやややがうの酒を飲むにむけり例の
袖を形くあつて香む友側ふあつたあうら
あつたあうらと葉縁何ぞの用ふまんと鼻紙縁ふ
貯つたあうらと葉縁の葉縁をね見むけり
へりけ今揚ニ言ひつてあつたあうらと葉縁の中へ
葉縁のほろあうらと葉縁あうらと葉縁のほろあうらと

...

...

新編

知れ 揚二コウ 藝及云まごい 酒が酔い 一の法は
ぬき 今ご 揚二ナニ 茶及云ぶら 酒の酔い 一の法は
め けれごも お釈が 酒をちび 香人の 香人ご 居ら
疑ぐ 一い 中あ 念晴 一香の さらも 息が ヱツト
香人ご 見せぬ 揚二ソリ 中何の 送伴も ぬきまご
ト かの 前前の せり 酒を 揚二コ ヤリ 一い へん 中
何ふを 一い ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
何を入 一い ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ら 一い ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
まご 一い ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
こり 中 古 揚 中 の 所 あり 遠く ぬき ぬき ぬき ぬき
一い ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
い ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
お釈の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
お釈の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
お釈の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
お釈の ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき



木下 三郎



木下 三郎

はれりし一羽の「イ」サくこり中アあふがこりしものから
はなれぬの梅の「イ」ヨフ強心を後しそふ歌
でもこどーはけへエ

こころの目ふ大志あがら版あぶぐ

研の手盛を喰ひ一若しと

ト出たあの一息ふさふさ〜大志ひとあう是より
そとくふはなも胸を〜いさを立出梅を友の
後ふし〜も 葉見 可うま〜と一婦〜建る取ぶけし

とも 春を「秋」ごうらまふうら遠くぬ〜 けま「秋」
でもう後形い〜びら〜ア本の葉の葉たんど
りんがいに又〜一羽の海り〜と速一音を〜ら〜
いのらふま〜を後推し

もうちふ知る梅の本娘

はま へん 秋歌あふ〜アこんあおざら〜 七情何ぞ
似るの品お〜お遠め〜り〜トキニお前のたまふお討
つ〜形〜の〜り〜中何捨た〜の〜ご けま 福の

福の

の

かつりサ七揚一そり申細つてゝ何の病も買つて
 のごヨ法去ハシお新うちふ茶番味の後が切き
 たまるものう茶見公茶尺ハアそんふ申うふ
 かのサ七揚一おうふ返直どの 法言「おつりア茶よ
 かい申今ふ見ぬ」是がど人ふ茶番味移ふある
 細れ申おぬハウ茶尺ハト 自叙が板をして買つ
 茶尺ハ尺ハお札を打せんを茶尺ハ 茶尺ハ「然うヨ十は五のうを
 ちむ申茶尺ハ尺ハおし」 茶尺ハ「然うヨ十は五のうを
 申解らぬ」はの金程者一そりばんけ 法言「那

親父がノウ全休は必ダ十賣あるを命小買つて
 ちらうて言つてら茶尺ハ尺ハのふ強味茶尺ハ尺ハ
 茶尺ハ「フンお新の尺ハ尺ハを利くそらぬと
 理借小買ふとそらド申ぬ」法言「然うヨお新が尺ハ
 ぬ」て命の申ある或命おしても言ひつて
 ちらびげごうら十よりおふて買ひぬく積り
 つてけれどもお新の言はふ新く茶尺ハ尺ハ「尺ハの親父が
 強買して買つてら新く買つて十は五も押し

茶尺ハ尺ハ

の十

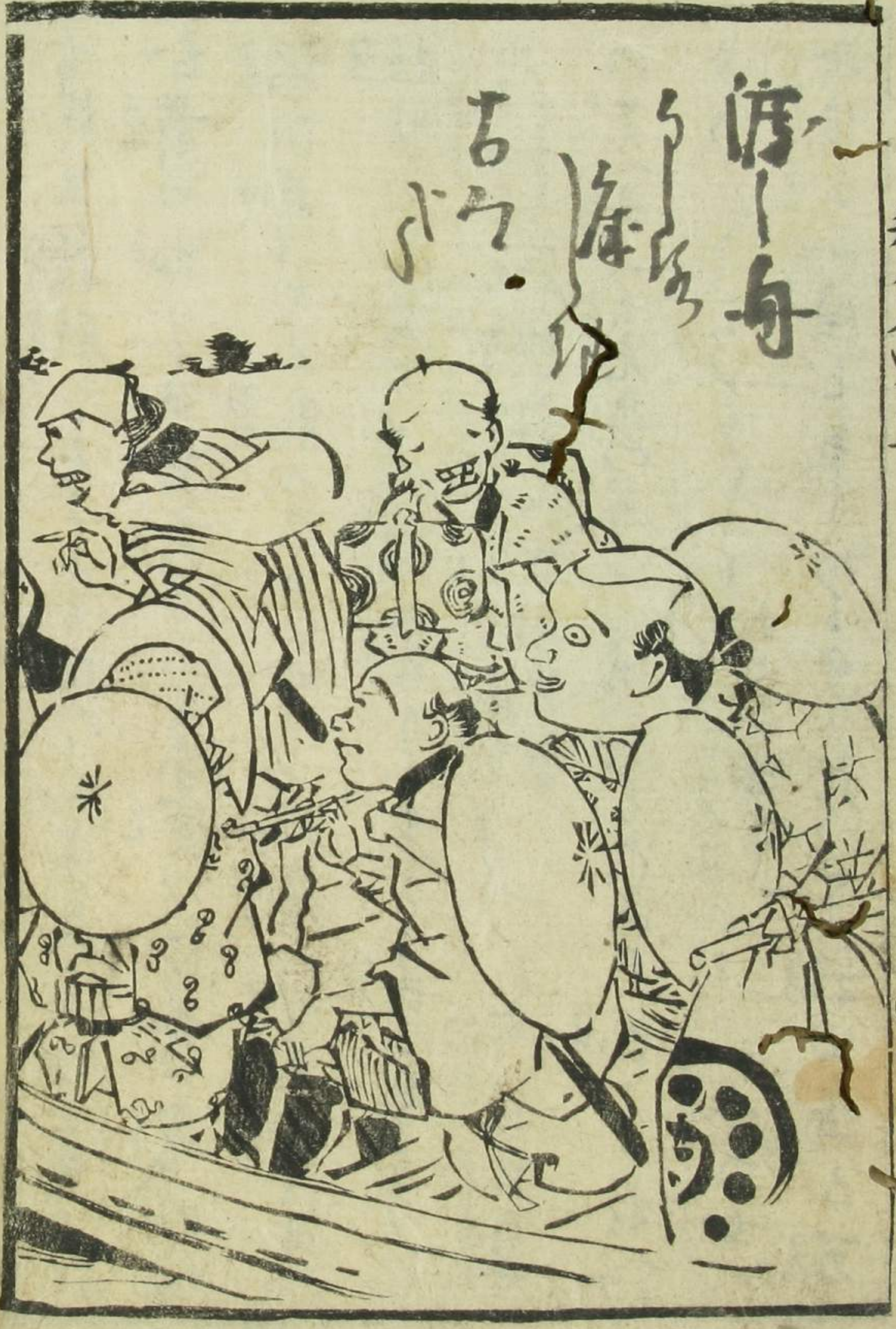
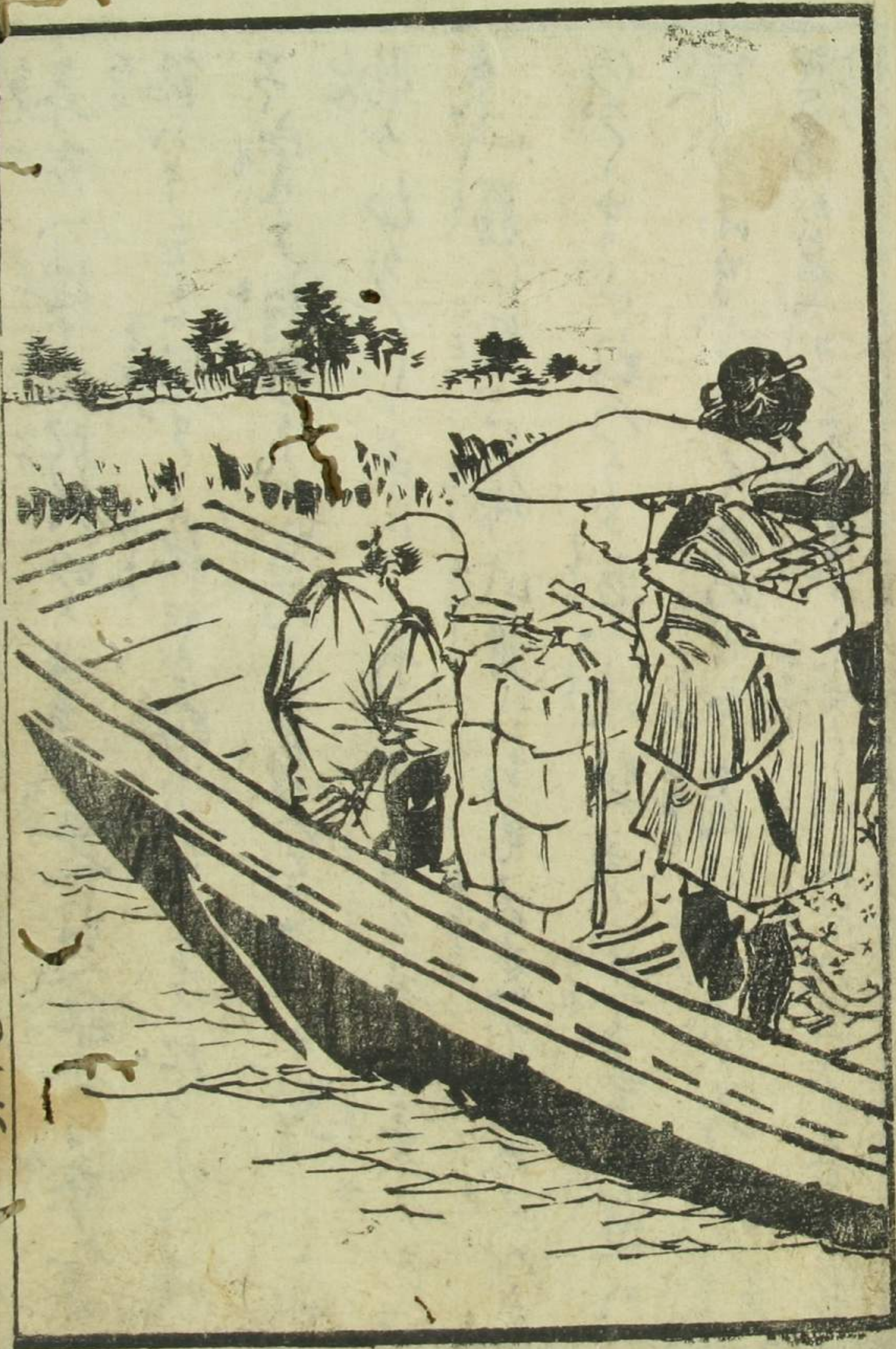


後ぞト 船不 船不 船不
 御先の方小後ろ 腕を掛く 船増
 の。ワレ 船不 船不 船不
 御阿 御阿 御阿
 方 方 方
 紙をもんぐ 船増 船増
 くの面ぐ 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増

見えやア見え 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増
 船増 船増 船増

船増 船増

船増 船増



江戸
海
石

和名
江戸
海
石

和名
江戸
海
石

二人前まへツツ中ちゆう々々とと思おもつつ土つち場ば十じゆ三さん食じきふふりりあり
 つらつら海うみははとと中ちゆう々々二人前にんまへごごうう々々寔じつふふちちををたたすす
 ままごごつつくく走はしりりんん圍いるる変へりり只ただささるる重おもいい西にしのの皮かわのの
 ううままへへ又またむむとと重おも冠かんののつつららああ成なりくく厚あつううままりり
 ああつつここ小こ中ちゆう々々寔じつ不ふ因いんははごご和わ淡たん「「たた理りごご今いま智ちををたたがが
 へへいいままくくトト言いつつくくいいままけけ張はちち「「ここ人ひとのの変へををいい
 奴やつ等らががおお不ふ以い入い違ちがひひををたたくく徳とく久く利り野の良らめめトト
 せせごごいいたたららぐぐ「「ああむむ極ごく小こ市いち場ばももるる死しつつるる見み

拙せつもも晒さら落らく後ご悔くわいりりくく中ちゆう々々生なま妻まのの建た場ば不ふ列れつ
 くく世よ妙めうああくく志しづづくく体ていををけけるる
 是こゝよりより神かみ奈な川がは向むかひひのの清きよ秘ひ名なとと金かね沢ざ江が
 のの傍かたはら倉くらをを見み物ものののおおうう「「ままでで他た者もののの
 智ち恵え家かをを送おくささふふ悔くわいりりくく牙が五ご編へん之の冊さく
 不ふ著しやく「「所ところ古こ法ぽうののああふふ及およびびををたたええ物もののの
 及およびび中ちゆう々々細こま不ふ書しよののせせくくああららまま中ちゆう々々よりより
 自みづからら勸すす懲ちやうのの一ひと助すけととああせせばば香か官くわんのの切き重じゆう

二八

二八

58
2
348
116
458

57
26
342
114

等とらよろしくひんをねとん

滑稽音和合人四編下了

東都 狂訓亭 爲永春水作

東都 一筆菴 溪齋英泉画

大傳馬町二丁目

東都書肆 文溪堂丁子屋平兵衛板

